2019年ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア活動報告

日時：2019年2月7日～10日
場所：フィリピン共和国首都マニラ市近郊スラム：ナボタスエリア・トンドエリア

医師	1名
歯科医師	24名
看護師	3名
歯科衛生士	11名
歯科技工士	3名
歯科助手	4名

学校教員	2名
一般参加者	16名
高校生	64名
中学生	4名

現地参加者：132名
現地通訳：18名
現地スタッフ：約100名

現地物資配布内訳（一人につき）
「歯ブラシ10本・タオル2枚・固形石鹸2個・お米2キロ」×850人分

2月7日　出発日　成田空港

午前7：00。成田空港国際線ターミナルはすでに沢山の人たちで賑わっています。仕事や旅行、家族や友人・・・様々な理由で今日も多くの人たちがこの食空港を利用するなか、今年もＪＡＬカウンター前では沢山の荷物を持ったハローアルソン(ハロアル)のメンバーが搭乗手続きを行っています。

今年は過去最多となる132名の方々が全国から集まってくださり、内、中学生4名、高校生64名が現地参加を志望してくれました。

今年で14回目となるハローアルソン・フィリピン医療ボランティアも年々少しずつ規模が多くなり、現地では大型バス3台、中型バス2台が用意されています。

そして、今年も参加者一人一人が機内への預け荷物として、歯ブラシやタオルを詰めた10キロ物資袋を持参し、現地に直接持っていきます。

　全員が手続きを終えると、空港内で「朝礼」を行います。
ここでは事務局紹介からマニラ到着までの注意事項、そして 132 名が初めて全員顔を合わせ、事前に配布された「しおり」をもとに全員が「10 班」に分かれていきます。
班の先頭には各班長が「班旗」を持って座っています。
そして朝礼が終わると会長　林春二先生から今年の活動目標「一致団結」が説明されました。
「心を一つにして一生懸命頑張る。」
いよいよ今年の活動が始まります。今年はどんな感動や出会いが待っているでしょうか。

現地時間　ＰＭ　13：30 マニラ空港到着

　気温氷点下の 2 月の日本から飛行機で 4 時間後、すでにマニラは気温 28 度を超え、冬服に身を包んでいたメンバーも一様に上着を脱ぎ始めます。
　私はこの瞬間がとても好きです。
　マニラに到着し、いよいよバスに乗り込むとき、赤や黄色、青や緑などとてもカラフルな「ハロアルＴシャツ」が一斉に視界に飛び込んでくる瞬間です。
　今年も 132 名全員が今年モデルのボランティアユニフォームでもある「ハロアルＴシャツ」を着ています。

　年齢も職業も関係なく、同じ目的のために今、132 名の日本人が心を一つにします。
「一致団結」いよいよ 2 班に分かれ会場に向かいます。

2 月 7 日　物資配布活動・器材準備

1 班は中高生、初参加の一般の方及び各支部高校生担当者、撮影班、2 班は器材、材料担当者及び医療関係者に分かれ 1 班は物資配布活動、2 班はホテル内で器材準備や明日からの医療奉仕活動の準備をおこないました。

物資配布活動「RIZAI STADIUM LEVERIZA PASAY」

この地域は私たちが毎年宿泊しているマニラ市内のホテルからわずか 2〜3 分の所に位置しています。

以前はマニラ市内や町の中心部にも 2〜300 人程度の小さなスラムが無数に存在していました。しかし、新しく大統領が変わり麻薬撲滅や治安維持の強化のために、スラムの大規模な解体が行われたことにより、現在はその数も大きく減少しました。

このエリアは人口約 1 万人で住民たちは主にトライシクル（バイクタクシー）や物売りなどで生計を立てています。一日の平均収入が 500 ペソ（日本円で約１０００円）です。

政府の政策により周囲には無料の公立の小学校や病院が建設され、少しずつ生活は良くなってきています。しかし、マニラの市街地でありながら、未だ歯ブラシやタオルなどの生活物資の支援を求める人たちが大勢存在し、街中を裸足で駆け回るストリートチルドレンも未だ多く見られます。

ここでは私たちと長年活動を共にしている現地チーム「マニラ・ラハ・ソライマン・ロータリークラブ」のメンバーと共に、このエリアの最貧困層約 250 世帯にお一人「歯ブラシ 10 本・タオル 2 枚・固形石鹸 2 個・お米 2 キロ」を支援しました。

会場は大きなショッピングモールに隣接する駐車場を利用し、中高生を中心に一人ひとり手渡しで物資をお渡ししました。

私たちが到着するのを何時間も前から待っていてくださり、とても陽気な笑顔で迎え入れてくれました。

その笑顔に始めは緊張気味だった高校生たちも緊張がほぐれ皆さまからご協力いただいた物資をしっかりと手渡すことができました。

器材準備

物資配布活動を行っている 1 班に対し、2 班は医療従事者を中心としたメンバーで、明日から使用する器材や物資の準備をするために直接空港からホテルに向かいます。

このホテルはすでに 10 年ほど前から利用し続け、ホテル側も私たちの活動を支援してくださり、ホテルの倉庫に私たちの器材を無料で保管してくださっています。

それらすべての器材をあらかじめ予約しておいた器材部屋に移動させ、さっそく手分けをして準備をしていきます。

今回も器材担当でもある岡山県きもと・まなべ歯科医院　木本先生が出発までにすべての材料や器材の状況を調べ、用意をしてくれました。

高校生マニラミーティング

毎年、4 日間の活動中夕食後、すべての中学生、高校生を対象にホテル内の一室を貸し切り約 1 時間半の「高校生マニラミーティング」を行います。

これは毎年一つのテーマに沿って自分の意見を挙手制で思い思いに発表をする会です。これは正解を導くのではなく、親元を離れ、日本とは全く違った環境で生きるスラムの人たちと触れ合い、日本では治せる歯もここではそのほとんどが痛みを取る最後の手段「抜歯」を選択しなければならい環境を知ることによって、自分自身何を感じ、何を学ぶことができたかを語り合います。

今年のテーマは「夢について」でした。

積極的に手を挙げて発言する子。

周りを気にして手を挙げることができない子。

緊張と恥ずかしさで葛藤をしている子。

このミーティングは 3 日間続きます。今年も沢山の高校生の夢が聞けそうです・・・。

2月8日　医療奉仕活動1日目「NORTH BAY EAST AREA」

ＡＭ７：００

　ホテルロビー前にはすでに大型バス3台が待機し、その前には今年もマニラ警察の白バイ隊員の皆さんが治療会場までの先導のために駆けつけてくれました。
　マニラの渋滞は世界的にも有名で、特に朝夕の出勤時間などは自家用車だけではなくバスやジプニー（バスタクシー）、トライシクル（バイクタクシー）などで主要道路は身動きが取れないほどです。そのため、実際は車で40分程度の所も倍以上時間がかかってしまう場合もあります。

　そこで昨年から現地スタッフたちがマニラ警察に対して私たちの活動はスラムの方々への医療ボランティアということを説明し、協力を仰ぎ、バス移動に際し全ての信号や車を一時的に通行止めにし、会場まで先導をしてくださることになりました。
　早朝ＡＭ７：３０　すべての準備が整いメンバーがバスに乗り込みました。
すると、けたたましいサイレンの音が一斉に鳴り響き、マニラの街中を走り出します。
　街の人たちも何事かと振り向きますが、白バイが次々と目の前の車を左右に移動させながら私たちのために道を作ってくださり、前方の交差点を見るとすべての車が警察官によって停車させられています。
　沢山の人たちが協力をしてくださり、私たちの活動を支えてくださります。

　今回の活動エリアは、マニラ市中心部から車で約40分、マニラ湾に面したNavotasという地域です。ここは東南アジア最大の漁港といわれており、古くから漁業の町として栄える反面、海洋水路の発達は密輸や麻薬などの流通経路として利用され、国内でもとても治安の悪いエリアとされていました。
　しかし、近年は政府の政策により劇的に変化を遂げ、私たちが以前訪れた時とは比べ物にならないほど街並みが綺麗になり、住民の多くも徐々に職に就くことができその内70%は漁業関係もしくは造船などで生計を立てています。

今回の活動場所は政府がスラムの住民や路上生活者の生活改善、治安維持の一環として推進し、建設された公共のアパートが立ち並ぶエリアでここには 1380 棟に約 9000 人の人たちが住んでおり、入居費用や家賃などはなく、その代わり建物全体のメンテナンス費用（共益費）として 1 か月 300 ペソ（600 円程度）を支払います。ここでは 1 家族に 2 人の就労者がいると仮定して一日約 500～600 ペソの収益のため、ここの共益費を支払うことはなんとか可能ですが、3 か月未納になると督促状が届き 1 年間の猶予のなかで支払わなければならない仕組みになっています。

また、行政もこの地区の貧困改善のために、漁師は使用する漁船を国から 5 万ペソ（10 万円程度）でローンを組むことができ、網は国が無料で支給しています。そして子供たちにも漁の技術習得のための資金援助や学校を設立し、「教育」と「労働」によって犯罪の芽を摘んでいます。しかし、万が一家族内に犯罪者が出た場合は、全員が公共アパートから即退去しなければならず、そのため不定期で市の職員がチェックをしています。

治療会場は住民たちの憩いの場でもあり災害時の避難場所でもあるバスケットコートを利用しました。ここは海沿いの地域であるため台風や大雨の際には周囲がすぐに冠水してしまいます。そのため建物はコンクリートの壁に囲まれ少し高い土地に建設されているのが特徴です。

会場には朝から多くの人たちが列をなし治療開始を待ちわびている中、Navotas 市長もハロアルの活動に心から感謝をしたいと激励にやってきてくれました。

治療内容はやはり抜歯や義歯の作成依頼がとても多く、生活が改善傾向にあるとはいえ、住民たちのお口の中はボロボロです。特に子供たちの奥歯「第一大臼歯（6 歳臼歯）」の抜歯が多く、会場では幼くして多くの子供たちが大切な体の一部を失っていきます。ここでは継続的な治療の有無や器材・材料などの問題から、痛みのある歯は抜歯を選択するしかありません。そして慢性的栄養不良のスラムの子供たちの中には立った 1 本の虫歯の菌が全身に波及し死亡してしまう子も少なくはありません。そのため貧困地区での「抜歯」は単に痛みをとるというだけではなく、命を救う治療にもなっているのです。

2 月 9 日　医療奉仕活動 2 日目
「UPSKILLS FOUNDATION : BARNGY 105 VITAS TONDO」

医療奉仕活動 2 日目は「TONDO（トンド）」です。

ここは 1980 年代後半まで「東洋一のスラム」と呼ばれたゴミの収集所「スモーキー・マウンテン」があったエリアです。

フィリピンでは当時、日本のような細分化されたゴミの分別や焼却システムがなくそのほとんどを埋め立てていました。ここには毎日マニラ市内から約 3,000 トンものゴミが運ばれ、鉄くずやビニール、プラスチックなどが長期的に放置されることによって化学反応を起こしゴミの山から出る噴煙からその名が付きました。

そして、そのゴミ山の周辺には「スカベンジャー」と呼ばれるゴミを拾ってお金に換金し生活をする人たちが沢山住んでいます。

彼らは主に地方から首都マニラに職を求めてやってきます。しかし、容易には職に就くことはできず、治安の悪い都会での物乞いより、このゴミ捨て場の住民となり安定したゴミの供給によって生活をするほうがはるかに良いといいます。

現在この場所は閉鎖されて別のエリアに移りましたが、いまだ数千人のスカベンジャーが生活をしています。

このエリアは 10 年ほど前から医療奉仕活動の拠点ともなっている地域で、毎年場所を変え様々なバランガイ（集落）で活動をしています。

今回はバランガイ 105 です。この集落は約 22,000 人が暮らしており主に港で荷物を運ぶポーターや建築関係、中には調理用ニンニクを剝く仕事（1 キロ 10 ペソ（約 20 円））や、やはりゴミを拾いながらスカベンジャーとして生活をしている人たちも多くいます。

このエリアでの収入は、現在フィリピン国内で定められている一日の最低賃金は 510 ペソ（約 1,200 円））に対し、一日一人平均 100 ペソほどしかありません。

そしてこの地域はフィリピン国内でも最貧困層のスラムであり、夜になれば銃犯罪や薬物犯罪が多発し、スラム居住区内では昼間から妊婦や子供までもがシンナーを常用している者も多くみられます。

このエリアで病気になれば無料のクリニックに通うことができますが、週に一度しか治療を受けることができず、一日数人程度で薬の種類も少なく、無い場合は自分で購入しなければならないためほとんどの住民が治療を断念します。

集落のリーダーに「この地域に今一番必要なものは」と尋ねると彼は「教育と医療」と即答しました。そして「こんなにも大きな規模の歯科ミッションは初めてです。なんて幸運なのだろう。そして沢山の人が治療をしてもらえます。そのうえ歯ブラシやタオル、石鹸まで貰うことができました。とても感謝しています。」と話してくれました。

増設シャワーブース

昨年から私たちの活動に「シャワーブース」が加わりました。

スラムの子供たちは私たち日本人ように毎日きれいな水やシャンプーを使って体や頭を洗うことができません。

そこで地元のメンバーたちと共同で高校生たちを中心に今年は4つのシャワーブースを作り二日間で約600人の子供たちを洗うことができました。

スラムでは水はとても貴重な存在になります。上下水道などのインフラ整備はほとんどなく、子供たちは体が汚れれば海に飛び込み水浴びをしながら洗うか、スコールの時に外に出て屋根伝いに流れ落ちる雨水を使うしかありません。そして石鹸1個が貴重なスラムでは毎日を清潔に過ごすことなど不可能です。

そこで昨年から地元ロータリークラブのメンバーの依頼もありこの活動が始まりました。高校生たちが順番に子供たちの頭や体を洗います。子供たちも初めての経験に会場は大騒ぎです。

2 月 10 日　活動最終日　物資配布活動「KAINGEN KAWIT CAVITE」

活動最終日は既に 10 年以上支援をしている「カビテ市」にある集落に向かいました。午前 9 時 30 分、私たちが会場となるバスケットコートに到着すると既に数百人の住民たちが待っています。ここでは「歯ブラシ 10 本・タオル・2 枚・固形石鹸 2 個・お米 2 キロ」を約 600 人に配布いたしました。

住民の皆さんからは口々に「先生、去年も来てくれたじゃない、今年もありがとう。」とほとんどの人たちがハロアルを覚えてくれていました。私が「このお米は今日食べるの？」と尋ねると「もちろん！」と嬉しそうに答えます。

ここでは中高生全員で 600 人お一人お一人に物資を手渡していきました。

ふと会場を見ていると、ひとりの女性がお米の入った袋を落としてしまい、バスケットコートにそのお米が大量にこぼれてしまいました。彼女はとても悲しい顔をしてこぼれたお米を見つめています。私がもう一袋彼女に渡すと、満面の笑みを浮かべ何度もお礼を言いながら去っていきました。すると、すぐに小さな男の子がやってきてその床にこぼれ埃だらけのお米を素手でかき集め始めました。それも一粒の残らず・・・。

私は言いようのない気持ちになりました。

会場では高校生たちが一生懸命笑顔で物資を配ってくれています。そして最後の住民が物資を受け取るころ、誰にも気づかれることなく少年は落ちた米を拾い終えスラムに帰っていきました。

一人の幸せのために・・・

活動 2 日目、一人の少女が私のもとにやって来ました。年齢は 19 歳。主訴は上の前歯 3 本を抜歯したい、というものでした。

見ると既に 1 本は幼い頃に抜歯をされ、残りの 3 本の前歯が虫歯になり黒く変色をしています。虫歯の深さも大きく痛みを伴う時もあるそうです。

私は彼女に尋ねました。

「抜歯をすることはできるが、その後ここはどうするの？」
彼女は答えます。
「入れ歯を作りたいです。」
私「入れ歯を作るにはかなり高額だけど、作ることができるの？」
彼女「・・・・。お金を貯めなければね・・。」

聞けばまだ 19 歳の女の子。兄弟は 7 人。一番上の長女で家族を養うために学校へは通わずパン工場にずっと勤めています。
彼女の一日の日給は約 500 ペソ（約 1,000 円）です。彼女のお給料はそのほとんどを家族の生活費ために使います。
フィリピンでは地域によって多少の差はあるものの、一つの入れ歯を作るのに最低でも 5,000 ペソは必要になります。これは彼女の 10 日分のお給料であり、その他に診療費、抜歯費用、お薬代などもかかり、スラムの人たちにとって入れ歯を作ることはとても高価であり大変なことになります。
医療活動の原則は「一人の患者さんにつき一つの主訴」となっています。これはできるだけ多くの人たちに平等な条件下で治療をさせていただくためです。しかし、私は彼女と話しをしながら彼女の主訴と私たちが行う治療、そしてこれからの未来を考えるとどうしても「抜歯」だけで終わるにはあまりにも切ない気持ちになりました。
まだ 19 歳の一人の女の子が前歯 4 本を失ったままこれからの人生を歩み続けます。

それは年頃の女の子にとってもとても恥ずかしい日々でしょう。しかし、貧困のため家族のために毎日働き、今日を生きていかなければならない少女を目の前にし、私は特例として、抜歯後、入れ歯まで作ることを話しました。
すると彼女は目に涙を浮かべながら「本当！信じられない！先生ありがとう！」とはしゃぎます。
私はカルテにすべての治療手順を明記しそれぞれの担当をしていただく先生にお願いをしました。

その一連の経緯を私の後ろで今回中学 2 年生で参加をした息子が見ていました。私は彼に患者さんを技工ブースへ誘導するように指示をし、そして話しました。

「日本では間違いなく治せる。しかし、この場所で今できることはこれが精一杯。これを見て良いか、悪いかは誰にも判断できない。今お前がやるべきことはこの世界の貧困の現状と理不尽さを決して忘れることなく胸に刻むこと。」「そしていつかこのような女の子が一人でも無くなるように「人のために生きる」そんな大人になること。」

彼女はまず技工ブースで入れ歯作りの形採りをし、次に抜歯ブースにて歯を抜きます。その後約３時間後にもう一度会場に訪れ失われた前歯に新たな義歯を入れます。

彼女が抜歯までを終え私のもとに戻ってきました。私は彼女に「大丈夫？それではもう一度３時間後においで。」と話し、彼女は一度帰宅します。

そして午後の治療時間となり、再び彼女がやってきました。
すでに技工ブースでは技工士チームが彼女の入れ歯を作り終えてくれました。
愛知県　高浜市　キララ歯科　加藤先生を中心に入れ歯の調整が始まります。
何度も適合を調整し、発音や取り外しを練習します。
そしてついに彼女の入れ歯が完成しました。

すると周りで治療にあたっていたスタッフから歓声と拍手が沸き起こります。彼女は照れながら満面の笑顔で「サラマッポ（ありがとう）」と何度もお辞儀をします。
と、同時に現地活動統括責任者の今西先生から活動終了の合図が出されました。
私は遠巻きにその光景を見ていると、彼女が私のもとにやってきてこう言いました。
「先生、本当にありがとう。私は今日の日を一生忘れません。」
私はただ一言「元気でね。」と声をかけ、彼女は出口ゲートに歩いていきました。

私は隣にいる息子に言いました。

「一人の人間の幸せのためにこれだけ多くの人たちの手が必要となる。幸せはみんなで作りみんなで分かち合うもの。お前も将来も「その手」となって誰かの幸せのために生きることが人間になりなさい。」

外からは少しずつ夕日が会場に差し込み始めました。15 年前、初めてこのスラムに訪れてから何度この夕日を見たことでしょう。
私たちが作ったたった一つの入れ歯は生きることさえも当たり前に感じている私たち日本人に多くのことを学ばせてくれました。

彼女の満面の笑みが今でも脳裏に焼き付いています。来年ももっと沢山の笑顔が作れるよう更なる活動を目指し頑張っていこうと決意しました・・・。

感謝を込めて

ハローアルソン・フィリピン医療ボランティアも今年で 14 年目を迎えました。
今年も多くの参加者を賜り、全国から沢山の歯ブラシやタオル、石鹸、文房具などをご協力いただきました。心より感謝申し上げます。
　また、全国から過去最多となる高校生が参加を希望してくれました。私たちの活動をご理解いただき、ご支援くださったご父兄の皆様、並びに学校関係の皆様、本当にありがとうございました。
　私たちの活動は本当に小さなものです。しかし 14 年間、沢山の皆さんのお力添えのおかげで少しずつ活動の輪が広がり、今年も素晴らしい活動ができました。
　これからも皆さんが私たちに託してくださる「思い」を決して裏切ることなく誠心誠意頑張ってまいります。どうかこれからもご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

物資配布

	2月7日	2月１０日	計
物資配布	２５０名	６００名	８５０名

医療奉仕活動

	2月8日	2月9日	計
クリーニング	１２４名	４２７名	５５１名
保存	５０名	６５名	１１５名
抜歯	１６８名	２０２名	３７０名
義歯（入れ歯）	5名	7名	１２名
耳鼻科	５８名	８６名	１４４名
シャワーブース	２５６名	３５０名	６０６名
投薬のみ		1名	1名
合計人数	６６１名	１１３８名	１７９９名